独立行政法人 国立病院機構

四国こどもとおとなの医療センター

アートプロジェクト

―今月のショット―

企画者の高橋雅子さんです。
昨年当院にクリスマスカードを届けてくださいました。

2015年　1月号

―院内の小さな声から―

高橋雅子さんからご連絡いただいたのは昨年の秋のことでした。冬になって、はるばる東京から手作りのクリスマスカードを運んでくれた高橋さんは、大きな黒いリュックを背負っていました。黒ぶちの眼鏡に白いブラウスが印象的でしたが、何よりリュックから取り出される持ち物がカラフルで、見ているだけでも楽しくなりました。同じようにカラフルなクリスマスカードはサインペンや色鉛筆で時間をかけて丁寧に書き込まれていて、「こんな元気な色の風が病院の中に吹いたら素敵だな。」と思いました。

高橋さんは笑顔で、これまで病院でどんなにユニークな人形が誕生してきたか。闘病中のおばあちゃんたちの見事なお裁縫技術や、布を選ぶ子どもたちの興奮を臨場感たっぷりに伝えてくれ、その人形たちを持って世界各国の病院に行くつもり。と夢を話してくれました。そのエネルギッシュな活動の原点に、若くして亡くなった大切なお友達の闘病生活があることも。

「人形の数だけ仲間がいる。ひとりぼっちじゃない。ってことに気づいてもらえたら。」今年も人形たちと高橋さんの旅は続きます。当院も参加を予定しています。

ハッピードールプロジェクト 2014

What a Wonderful World

体の痛みより　心の不安でいっぱいになる時がある。

再発を知って　絶望的に思えることもある。

ひとりぼっちで闘うのが　悲しくなる時もある。

そんな時　気持ちがほぐれるおしゃべりができて

同じように苦しみもがく人が世界中にたくさんると気づけたら…。

目が覚めるような多彩な布や材料に触れながら

願いをこめて好きなものをつくり　できた喜びを分ち合えたなら…。

きっと心あたたまり　明日を生きるささやかな希望がわいてくるに違いない！

そう願いながら　今年もHappy Doll Project は旅を続けました。

中略

これからも私たちは　病院でおしゃべりしながら共に生み出すひとときに感動し

仮設住宅に暮らす人々や　世界の子どもたちと出会えた奇跡に感謝し

別れの瞬間は胸がいっぱいで言葉につまり　またの再会を切に願い続けることでしょう。

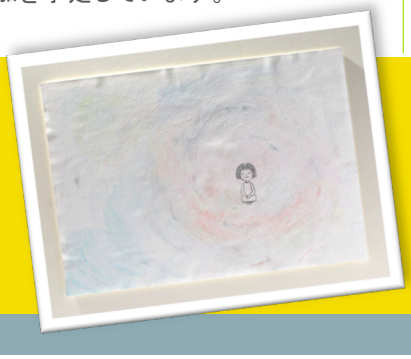
そして生まれた作品は人と人をつなぎ　笑顔をつないでいくと信じています。

2014年10月27日

Founder of Happy Doll Project

高橋　雅子

今月の一枚



作家：R

人や物や、例えば同じ括りの中で物理的な違いがあるものであっても、どこかに共通する何かがあるような気がしていて、そこを自分なりに目指して探りながら描きました。ただそこに在るだけなんだけれどもそれでもまぁいっか、と思えるような物であればいいなと思います。